

神戸市立博物館の活動目標と指標 平成23年度(2011年度)

使命(要点) ○多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。 ○優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。 ○市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。 ○震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。 活動指針 ○市民が誇れる博物館 ○すべての人々に親しまれる博物館 ○地域の文化を支える博物館 ○情報発信をする博物館		「神戸市教育振興基本計画」の4段階評価の基準に準じる <table border="1"> <tr> <th colspan="4">段階評価の基準について</th> </tr> <tr> <td>A</td> <td colspan="3">目標が十分達成されている(9割以上)</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td colspan="3">目標がほぼ達成されている(7~8割以上)</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td colspan="3">目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td colspan="3">目標が達成されていない(5割未満)</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td colspan="3">評価が困難</td> </tr> </table>				段階評価の基準について				A	目標が十分達成されている(9割以上)			B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)			C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)			D	目標が達成されていない(5割未満)			F	評価が困難		
段階評価の基準について																													
A	目標が十分達成されている(9割以上)																												
B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)																												
C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)																												
D	目標が達成されていない(5割未満)																												
F	評価が困難																												
				内部評価																									
活動目標				評 価																									
◎活動内容 【目標 計画】				評 価																									
○戦略・方向性				評 価																									
□指標		参考数値	評 価																										
△参考指標		参照. 比較値(過年度実績等)	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント(必要な場合)																							
						活動目標◎																							
						活動目標○																							
						活動目標□																							
平成23年度自己点検評価 総評																													
23年度は、ソウル大学美術館、サントリー美術館といった国内外の美術館と緊密な連携をとり、充実した大型展覧会を開催することができたため、前年度B評価だった活動目標・「芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします」の項目をAの評価とした。その他の活動目標の評価は、前年度と同様であった。展覧会に関しては、大英博物館・古代ギリシャ展ではギリシャ・ローマ美術の名品を展示し好評を得、山本二三展は、芸術性の高いアニメーションの原画によって予想を超える来館者をむかえた。和ガラス展は、寄贈速報展として多くの来館者に所蔵作品をおひろめする絶好の機会となった。また、日本絵画のひみつは学芸員の日頃の研究成果を示す意義深い展観であり、平清盛は貴重な文化財にふれる機会を提供した。 学校や地域との連携は例年通り堅調であったが地域との連携は、広報活動の面など例年通りと言え、今後より広く展開し、形骸化・陳腐化しないためにも共催事業の新たな企画立案などを行う必要がある。 また、調査研究については、組織的取り組みが、展覧会事業等の事業量の関係から人的に余裕がなく、課題を残した。計画的、組織的な取り組みが求められる。資料の保存・保全については、予算及び物理的な制約がある中で、対処的な改善努力が行われているが、ハード面も含め日常的な管理が課題として残った。 館全体の設備面については、リニューアル基本計画を策定できた点は評価できる。今後は、基本計画実現に向け、財政当局との協議など努力していくことが求められる。																													
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします		全般的には目標がほぼ達成されたが、以下の2点において、23年度の目標に対して十分な成果が得られていないと考えられる。第一に、23年度は調査研究への組織的取り組みが、展覧会事業等の事業量の関係から人的に余裕がなく、課題を残した。このため、より具体的計画と進捗確認をもって進める必要がある。第二に、資料収集および資料の保存・保全については、予算及び物理的な制約がある中で、対処的な改善努力が行われているが、ハード面も含め日常的な管理の改善課題がある。また、IPMの面以外でも、保全し後世に伝え、そして情報開示の面からも、資料の基礎データの整理と把握も今後迅速にすべき課題である。				B																							
◎調査・研究を積極的に行います		研究課題の設定、調査活動は、組織的・計画的な取り組みとしてまだ不十分なところがあり、目標や期間を明確にして引き続き改善を進める必要がある。				B																							
【目標 計画】 調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、個々人の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を 諸活動に活かし、発信していく。																													
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開		個人レベルを含めた研究成果の発信は十分行われているが、基本となる調査活動は漸減傾向にある。とくに館としての組織的な調査活動に課題が多く、館全体の理解と協力のもとに計画を進められる取り組みが求められる。					B																						

□調査研究テーマの設定	当初計画していた調査・展示準備は進捗していない。	当初計画していた調査・展示準備は進捗していない。館全体の調査研究テーマとして認識し、研究成果発信の方法も見据えたうえで、もう一度調査計画を立て直す必要がある。			C
□調査件数	20年度 51ヶ所 21年度 40ヶ所 22年度 39ヶ所 23年度 33ヶ所	1ヶ所の調査であっても重要な場合もあり、また館内での調査は対象外としているため、数字はあくまで目安程度であるが、4カ年を通じて漸減傾向にある点に留意したい。人の偏り、公私のバランスなどの問題も含め、研究や展示の基本となる調査活動の活性化に向けて条件整備や姿勢について改めて考える必要がある。			B
□研究成果発信数	20年度 81件 21年度 67件 22年度 68件 23年度 69件	個人レベルを含めた研究成果の発信件数はほぼ例年と同じであった。博物館としては、所蔵資料や関係作品の調査をもとに、紀要・目録・博物館だよりの出版、展覧会の開催、図録の製作などを通じ、調査研究の成果を発信した。本年度は特に、コレクションの受入れにともなう受贈記念速報展「和ガラスの神髄」、自主企画特別展「日本絵画のひみつ」のほかに、ソウル大学美術館との共催で当館のコレクションを紹介し韓国で高い評価を得た「神戸市立博物館名品展：Meeting with the West!」（ソウル大学美術館）を開催し、海外も含めより幅広く情報を発信することができた。			A
◎地域の歴史に関する情報を発信します		平清盛展をはじめ地域に関する情報発信は例年に増して活発に行われ、期待に応えることができた。	A		
多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限っての調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく。					
○有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開		平清盛に関連して、特別利用などの対応件数が増加している。平清盛展ではこれまで馴染みの少ない時代であったが関心を呼ぶことができた。またギャラリーの展示では、近現代の神戸について様々な視点から興味を持っていただけた。例年に増して、地域に関する情報発信や対応は例年より活発に行われたといえる。		A	
□自主企画の特別展・企画展の開催	23年度：特別展2回、ギャラリー3回（22年度：特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回）	特別展「平清盛」では、常設展では展示することが難しい国宝や重要文化財を含む作品を多数展示し、平清盛と平安末期の歴史や文化について紹介した。また、ギャラリーでは、「絵葉書に見る神戸」「東遊園地と居留外国人」「西田眞人が描いた阪神大震災」などを通して、近現代の神戸の歴史や景観を紹介した。			A
□その他関連事業の開催	平成23年度のおもな実績：ミュージアム講座6回のうち2回。博物館を楽しむ3回のうち1回。ジュニアミュージアム講座5回のうち2回。こうべ歴史たんけん隊1回。ギャラリー展示での学芸員によるギャラリートーク4回など。	各年齢層の方々に興味や理解を深めていただくために、特別展や企画展、ギャラリー展示の趣旨や内容に応じて各種の関連事業を開催することができた。			A

□地域資料の展示	平成23年度のおもな実績：特別展「平清盛」神戸市内に伝来あるいは市内からの出土資料約35点（関連資料は数十点）。ギャラリー「絵葉書に見る神戸」約40点、「東遊園地と居留外国人」23点、「西田真人が描いた阪神大震災」	特別展「平清盛」では、神戸にゆかりの深い平清盛と平安末期の歴史や文化について紹介することができた。ギャラリー「絵葉書に見る神戸」「東遊園地と居留外国人」「西田真人が描いた阪神大震災」などを通して、近現代の神戸の景観や人々の風俗などについて、興味や関心を持っていただくことができた。		A
□新聞雑誌や講演会での情報発信数	23年度：図録2件、研究紀要2件、博物館だより3件（神戸歴史見聞録・学芸員ノート）、個人としての論文、新聞記事（展覧会、ミュージアム講座）など館外での発信22件。 （22年度：図録4、紀要論文4、だよりノート2、個人の館外発信数29件）	平清盛展に関連し、新聞雑誌における地域に関する情報発信数は多くまた、質的にも充実していた。また、所蔵資料についての新たな研究成果を講演や紀要論文のかたちで市民に発信できている。		A
□地域史に関する対応件数	23年度特別利用：811件、うち地域史関係204件、その他：15件 （22年度特別利用：740件、うち地域史関係：143件、その他：16件 21年度 特別利用749件のうち143件、15件）	所蔵作品、地域資料ともに多くの特別利用の依頼に対応し、対応件数も例年より増加した。加えて各学芸員が、地域史や地域の資料についての様々な問い合わせに積極的に対応した。		A
○関連資料のDBの構築	DBは依然として公開に至っていないが、基礎となる画像数の準備は着実に進んでいる。		F	
□DBの利用数	本年度は美術作品・資料のフィルムのデジタル化を遂行し、特にカラーポジフィルムについてはそのすべてについて1600dpiの高精細画像として入力を完了している。最終的には9537件の作品資料の48397枚のフィルムなどをデジタル化、0.98テラバイトのデータが当館のデジタルアーカイブとして追加された。	画像数は飛躍的に増加したが、これを公開するための準備はまだできていない。		F
◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します	びーどろ史料庫のコレクションが寄贈されたことは、当館の長年にわたる活動が寄贈者との信頼を育み、評価されたものといえる。また購入予算は必要な資料の収集にはまだ十分とはいえないが、可能な範囲で改善が図られている。		A	
【目標 計画】 神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。				
○特色ある館蔵品等の充実、収集方針の明示と実績の公開	蒐集の方針に沿った資料収集が行われ、適宜展示などで活用されている。23年度で特筆されることは、びーどろ史料庫のコレクションが一括で寄贈されたことである。地道な活動が収集の成果としてあらわれたものといえる。資料購入は依然として厳しい予算であるが、当館に相応しい資料の収集ができた。			A
□資料収集数（購入）	19年度：2件7点3,335千円、20年度：0件0点0円、21年度：2件2点369千円、22年度：9件11点40,549.48千円	歴史資料5件¥1,643,448、地図資料1件¥250,000、美術資料4件¥1,225,000、合計10件¥3,118,448を購入した。各分野とも限られた予算の中で、有効な資料・作品の収集ができた。		A

	<input type="checkbox"/> 資料収集数(寄贈)	19年度43件647点総評価額16,973,600円、20年度:4件38点総評価額20,113千円、21年度:43件369点総評価額3,916千円、22年度は12件5076点・総評価額40,090.9千円	歴史資料6件(評¥702,000)、美術資料4件¥804,640,000、合計10件¥805,342,000の寄贈を受け、各分野とも限られた有効な資料・作品の収集ができた。 なお、収集資料について、保存と活用(資料台帳、データベース、収蔵庫内検索)を計画的にすすめ、安全で適正な収納と館内でのデータ共有化をはかる必要がある。				A	
	<input type="checkbox"/> 資料収集数(寄託)	23年度:0件(19年度:2箇所2,125点、20・21年度の受け入れは0件。22年度の寄託受入は0件、寄託から寄贈への移行が2件)	寄託資料の保存と活用のための、館内でのデータ共有化(資料台帳、データベース、収蔵庫内検索)については、目標を達成できていない。				C	
◎社会的資産としての文化財(館藏品)を保全し、後世に伝えます		限られた予算や体制の中で可能なものは実施してきているが、依然として、施設・設備の改善問題を含め、課題が多い。また東日本大震災をふまえ、危機管理について改めて検討する必要がある。			B			
【目標 計画】 収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理(IPM)が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。								
○方針の明示 ○良好な収蔵環境の整備		モニタリング・生物環境調査、清掃などは計画通りに実施。虫類の発生などで迅速な対応策が十分に取れない状況にあり、良好な収蔵環境の整備には、設備の改善を含め、課題が少なくない。						B
<input type="checkbox"/> 収蔵(保存)環境の調査・整備(IPM)		温湿度測定 毎週×3ヶ所 虫類のモニタリング 7回×49ヶ所 生物環境調査 7月・9月実施 収蔵庫定期清掃 全面2回ほか 殺虫作業 なし	モニタリング・生物環境調査、清掃などは計画通り適正に実施した。また、虫類・菌類の発生については、注意喚起、清掃、再モニタリングなどの措置を実施したが、大規模燻蒸、資料の仮置解消、設備の改修などが必要な事例(主に収蔵庫10・11以外)では迅速な対応をとることができない。 収蔵庫10は、調湿ボードの設置後、監視室との連絡調整および除湿器による調整、空調吹き出し口の工事によって、現状では温湿度の適正維持ができています。収蔵庫11は空調吹き出し口等ハード面の改修が必要である。				B	
○資料の保全		補修などの処置が必要な資料の数に比べ実施できる数は少ないが、緊急度の高いものから実施できている。						B
<input type="checkbox"/> 資料の補修		20年度:169点 21年度:315点 22年度	限られた予算の中で、資料の状態等を考慮しながら、緊急度の高い資料について実施することができた。				B	
○大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開		HPの大震災コーナーのアクセス件数が増加している。経験や教訓などの発信、また各種の問い合わせについても対応できている。						A
<input type="checkbox"/> 大震災の記録の利用		HP「大震災」コーナーのアクセス件数 16年度:11717件 17年度:10683件 18年度:12857件 19年度:13272件 20年度:11778件 21年度:15,126件 22年度:9,747件 23年度:10,932件	平成22年度に比べ、東日本大震災の影響もあり、アクセス数が増加している。また、東日本大震災の文化財レスキュー活動準備のために東京文化財研究所が資料センターで保管の資料を利用するなど、センターの意義を示している。				A	
◎館藏品に関する情報開示の整備をおこないます		館藏品目録、特別利用など定型業務としての情報公開は計画通りに実施された。データベースの公開には至っていないが、より多くの資料のHPへの画像掲載にむけ準備が進められた。						B

□常設展示内容	展示資料を補助する写真パネルを添えたり、キャプションや説明文を平易な文章で記すなど工夫した。	資料をより身近に感じてもらうために、各自工夫を重ねた。ギャラリーでの企画展示など、ギャラリートークも含めて、来館者から好評をいただいた。				A	
□展示解説開催数	平成22年度実績：実施日数84日、参加者数873人、平均11人。	参加者数一日平均10人程度	参加者数 271人、平均4.4人、参加者のいない日数14日	77%	前年度に比べ、参加人数が減少している。今後、この減少の原因を検討していくことが必要。	B	
□展示設備・施設の改修	大規模な改修は特におこなわなかったが、日常的な点検などは実施。	大規模な改修は特におこなわなかったが、日常的な点検など適切におこなえた。今後は、改修に向けた取り組みが必要。				B	
◎特色ある館蔵品を活かした展示を行います		コレクションを活かした展示会はおおむね計画通り実施され、公開されている。歴史や古美術の展示はどうしても満足度がやや低くなる傾向があるが、話題づくりや広報の充実とともに、展示の更なる工夫が必要。				A	
【目標 計画】 特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示（ギャラリーを含む）以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究にもとづいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する。							
○調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 ○南蛮・古地図の企画展の開催		東日本大震災の影響により展覧会計画が大幅に変更して、受贈記念速報展「和ガラスの神髄」が急遽開催されたことをはじめ、特別展「日本絵画のひみつ」など他の展示会も影響を受けたが、十分に対応することができた。日頃の活動の成果が発揮されたといえる。コレクションを活かした企画展、自主企画の特別展はいずれもねらいとおりの展示となったが、入館者数、満足度に課題がある。一方「山本二三展」は当館としては初の試みの企画であったが、予想以上の反響があった。					A
□展覧会開催	特別展「山本二三展」7月16日（土）～9月25日（日）、受贈記念速報展「和ガラスの神髄」10月8日（土）～11月27日（日）、特別展「日本絵画のひみつ」12月10日（土）～1月22日（日） 南蛮企画展「若芝と鶴亭」7月16日（土）～9月4日（日）、古地図企画展「鎖国」下の世界図」10月8日（土）～11月27日（日）	特別展「プーシキン美術館展」が東日本大震災の影響により中止となり、年度途中で展覧会スケジュールが変更になり、ガラスコレクションの受贈にともない「和ガラスの神髄」を速報展として開催した。自主企画の特別展、企画展は当館の特色あるコレクションと調査研究成果を活かした特色・独自性のある展示会となった。またビエンナーレ2011・プレ企画として、当館では初の試みであったアニメーション美術の展示会を開催し、予想以上の反響があった。また企画展でも定番の展示だけでなく、多彩な視点から企画した。				A	
□入館者数	「山本二三展」 「和ガラスの神髄」 「日本絵画のひみつ」	38,000人 19,000人 10,869人	84,353人 18,815人 8,448人	222% 99% 78%	「山本二三展」は想定を越える反響があったが、スタッフの増強、印刷物の増刷などで対応した。その他の展示会においても収支面から見ると達成度は高いと見られる。	A	
□満足度	大英博物館古代ギリシャ展：83.7。山本二三展：84.3。若芝と鶴亭：78.5。和ガラスの神髄：82.8。鎖国下の世界知識：73.8。日本絵画のひみつ：79.5。平清盛：77.9。平均：80.1。	平均値では80を達成することはできたが、一部の展示会では80以下におわった。残念ながらすべての展示会が、目標の85を下回った。古美術・古地図・歴史など展示会を見るうえで程度の知識が必要な催しは、ポイントが低い傾向が見られる。				B	

◎海外展などの特別展を開催します	大型海外展、大型特別展は、内外の著名作品を市民に公開できる絶好の機会であり、神戸市全体を活性化させるイベントでもある。今後とも博物館活動の中心として、マスコミなどと連絡調整しながら実施してゆかねばならない。展覧会の中身の充実をよりいっそう努め、広報活動も拡大してゆかねばならない。	A					
【目標 計画】 博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと共同し、質の高い大型展を年に1~2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。							
	○国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介	東日本大震災の影響により特別展「プーシキン美術館展」が中止となったことは想定外であった。開会式が震災の日となった「古代ギリシャ展」では、日本初公開となる《ディスコボロス（円盤投げ）》をはじめ、大英博物館が誇るギリシャ・ローマコレクションの神髄を紹介できた。「平清盛展」も国宝の平家納経をはじめ、名品の数々を紹介した充実した内容だった。ただし、目標とする入館者数にはやや届かず、経費と広報の面で検討の余地がある。		A			
	□特別展開催	「古代ギリシャ展」平成23年3月12日~6月12日 「プーシキン美術館展特別展 東日本大震災の影響により中止 「平清盛」平成24年2月25日（土）~4月8日（日）	特別展「プーシキン美術館展」が東日本大震災の影響により中止となり、開会式が震災の日となった「古代ギリシャ展」も震災の影響により開催の継続が危ぶまれた。展示の内容は、大英博物館が誇るギリシャ・ローマコレクションの中から日本初公開となる《ディスコボロス（円盤投げ）》をはじめ、135点を厳選したものであり、清盛展も国宝の平家納経をはじめ166点の充実した内容だった。いずれも観覧者の要求に十分応えることができた。		A		
	□入館者数	「古代ギリシャ展」 180,000人 「平清盛」 50,000人	143,205人 48,577人 80% 97%	東日本大震災の影響により、「古代ギリシャ展」の広報活動がTV・新聞紙面などで大幅に縮小されることとなった。会期後半は当初見込み程度には回復したが、全体としては入館者数にも大きく影響が及んだ。清盛展はほぼ当初見込みであったが、実行委員会の事業としては問題を残した。		A	
	□満足度	各特別展・企画展についてアンケートを実施。	各展覧会とも、満足度85以上が目標。大英博物館古代ギリシャ展：83.7。山本二三展：84.3。若芝と鶴亭：78.5。和ガラスの神髄：82.8。鎖国下の世界知識：73.8。日本絵画のひみつ：79.5。平清盛：77.9。平均：80.1。歴史、古美術、古地図など展覧会を見るうえで、ある程度予備知識が必要なものほど、満足度が低くなる傾向がある。列品解説以外に、展示を見るための予備知識の解説が必要かもしれない。		B		
芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします		学校や地域、そして他館との連携は概ね図れている。特に学校との連携は、近年、人的にはほぼ限界に近い事業展開を行ってきている。また、今年度は、ソウル大学美術館、サントリー美術館といった国内外の美術館と緊密な連携をとり、充実した大型展覧会を開催することができた。ただ、地域や同種の他館との連携は、広報活動の面など例年通りと言え、今後より広く展開し、形骸化・陳腐化しないためにも共催事業の新たな企画立案などを行う必要がある。			A		
◎学校との連携を図ります		学校・地域・他館との連携は図れている。交流できる博物館としての機能は十分に果たしているため、今後とも博物館活動の柱の一つとして維持、充実を図れるように努められたい。			A		
【目標 計画】 博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある							
	○学校との連携	「学社融合」に立脚して、学校との連携は十分に行っている。今後ともソフト・ハードの整備に努める必要がある。				A	

<p>□小・中・高等学校の 受入数</p>	<p>幼稚園 (17)2(18)6(19)1(20)6(21)1(22)1、小学 校(17)42(18)54(19)52(20)60(21)52 (22)52、中学校 (17)47(18)66(19)91(20)84(21)57(22) 83、高等学校 (17)22(18)33(19)54(20)32(21)20(22) 44、その他(大学・専修学校など) (17)13(18)14(19)26(20)43(21)23(22) 55、合計 (17)126(18)181(19)236(20)225(21)153 (22)235、校園、 (17)8500(18)10722(19)14575(20)11092(21)6812(22)9547人 過去6年間の平 均192.7校園10208人</p>	<p>学校の要望等に沿ったかたちで、来館への対応(幼稚園0、小学校47、中学校165、高校49、 その他61 計325校園10、652人)、オリエンテーション(来館校園のうち16.0%)、 またトライやる(15校29人)の受入など、適切な受入が図られている。</p>	<p>A</p>
<p>□連携数(出張授業等 のアウトリーチ数、教 材の貸出数)</p>	<p>(17)幼1小19中14高1計35(18)幼2小35中 12高1計50(19)幼2小54中18高2計76(20) 幼1小44中9高0計54(21)幼0小64中10高2 計76(22)保1小87中14高2大1 計105、過去6年間の平均幼・保1.1 6小50.5中12.8高1.3計66</p>	<p>例年よりも連携授業数は多かった。また可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを 進めることができた。保育園1、小学校103、中学校12、高等学校0、大学0、特別支援2 合 計118校</p>	<p>A</p>
<p>□教員研修の受け入れ</p>	<p>平成20年度より過去3年間の平均6.3 回252.3人。平成21年度より教師の研 修制度が変更されたため、①教職員社会 体験研修:神戸市立本山南中学校・玉津 中学校・こうべ小学校・尼崎市立武庫庄 小学校(4校延べ7日)、②7月14日小学校 社会科研究会20名、③8年目研修16名。 22年度は①神小研図工部・神中研美術部 研修42名、②高校地歴公民部総会9名、 ③中学校教育課程研究協議会(社会科) 小学校社会科研究会102名、④8年目研 修47名、⑤教職員社会体験研修(こうべ 小学校)1校1日</p>	<p>今年度も、8年目研修など、実態に即した研修の受け入れを行うことができた。①神小研図工部・ 神中研美術部研修24名、②高校地歴公民部総会30名、③中学校教育課程研究協議会(社会科)小学校 社会科研究会93名、④社会科臨地研修25名、⑤8年目研修22名、⑥こうべ小校内研修29名⑥中学校教 育課程研究協議会(社会科)57名</p>	<p>A</p>
<p>□大学との連携事業数</p>	<p>16年度:22校38名 17年度:20校37名 18年度:29校42名 20年度:23校39名 21年度:20校34名 22年度:30校28名</p>	<p>実習を公募として2年目を迎えたが、混乱なく受け入れすることができた。また、カリキュラムの構成は 例年通りであるが、本年は課題を博物館に展示されている作品(常設展、企画展、ギャラリー、学習 室など)から1作品(資料)を選択し、①作品キャプションと解説キャプション(200~400字程度) ②レポートを作成する。として、最終日、作品の横において実習生も含めて講評しあい、有意義な成 果が得ることができた。</p>	<p>A</p>

○教育普及プログラムの確立	文化庁のミュージアム活性化事業などの資金獲得により、普及プログラムの維持・充実が図られていることは望ましいあり方である。しかし、今後は博物館・美術館の連携によるプログラムの開発にあわせ、予算措置については自助努力する必要がある。		A
□教育普及プログラム数・内容更新	22年度実績（「南蛮屏風」連携授業：小学校7校、中学校3校、等学校1校。来館：小学校1校）	予定通り制作し、連携授業や学校団体来館時に活用することができた。「浮世絵」の授業については、昨年度13校に引き続き、今年度13校と安定して利用されている。	A
□子ども向け事業の展開	子供むけチラシやホームページ・広報紙KOBE上での広報活動	定例的な事業については例年どおり円滑に実施されている。展覧会に付帯する臨時の事業については、より一層周知を図り、事業に努めることが肝要である。今年度も、ホームページ・広報紙KOBE上での広報活動を行うことができた。	A
◎地域との連携を図ります	博物館はその立地する場所と不可分の関係であることを認識し、地域の商業施設、文化施設、学校などと連携を図らねばならない。そのために館独自のアイテムを開拓する時期ではないか。		A
【目標 計画】 博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地域の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりをもたねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない			
○居留地協議会、周辺商店街等との連携	展覧会にあわせて、共催、協力、連携の相手を獲得している。一方、単年度の展覧会にかかわらず、館独自の共催企画などを考案し、地域に向かって積極的に打ち出すことも必要である。		A
□連携数など	①センター街での吊り広告②半券で大丸飲食店街での優待③そごう外壁に垂れ幕広告をそごう側経費負担で実施④南京町の案内チラシの配付④「山本二三展」と県立美術館「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展で互いの半券提示での入館料割引⑤元町商店街との連携⑥「平清盛」展で「歴史館」と「ドラマ館」と連携し相互にチラシを設置⑦平清盛展で神戸文書館主催の「歴史シンポジウム 清盛・縦横無尽」に協力。シンポジウム終了後でも当館入館可能なように閉館時間を延長し、また、入館料の割引も実施。⑧各展覧会とも居留地協議会へは、積極的にPR活動を実施。⑨神戸市役所シティホールコンサート実行委員会と連携して館内ホールでクリスマスコンサートを実施。	周辺の商店街とも昨年より連携が取れた。大丸との連携も増加。県立美術館とも連携。展覧会内容により、ホテル・旅館関係ともチラシの設置や前売券販売などの連携があった。	A
□共催事業など	①文化財課と共催して、「東遊園地と居留外国人」展をギャラリーで実施。文化財課主催の講演会付きバスツアーに協力。②兵庫県立考古博物館等と協力して「みんなでつくろう新ひょうご風土記カルタ」事業に参加。③兵庫県生活文化大学（県芸術文化協会）の「美術鑑賞講座」に講師派遣と展覧会鑑賞教室を「平清盛」展で実施。④「平清盛」展で神戸市文書館主催の歴史シンポジウム「清盛・縦横無尽」に協力。入館料の割引と閉館時間の延長を実施。⑤神戸市役所シティホールコンサート実行委員会と連携して館内ホールでクリスマスコンサートを実施。	居留地シネマは実施できなかったが、文化財課との共催展覧会と県立考古博物館等との共催事業は実施できた。なお、ブーシキン美術館展は東日本大震災・福島原発事故の関係で展覧会自体が中止となったため、兵庫県生活文化大学（県芸術文化協会）の「美術鑑賞講座」は、代わりに「平清盛」展でおこなった。また、神戸市役所シティホールコンサート実行委員会と連携して、館内ホールでクリスマスコンサートを実施した。	B

<p>○生涯学習の支援</p> <p>□連携数（出前講座・講師派遣など連携事業数）</p>	<p>20年度 25件 21年度 15件 22年度 25件 23年度 23件</p>	<p>大学の博物館実習の授業の一貫として来館し、オリエンテーションをよび見学を希望する大学を中心に、連携依頼には積極的に応えている。地域からの連携の依頼は、日時の調整をして対応している。23年度からは、22年度とほぼ同額の件数であるが、より有効な連携の在り方を検討する必要がある。</p>		A
<p>◎他の博物館・美術館との連携を図ります</p>	<p>国内外の博物館、美術館と十分な連携と協力を果たした。今後とも良好な関係を相互に築いてゆく努力をしなければならない。</p>		A	
<p>【目標 計画】 博物館は単独では存続し得ず、常に同じ博物館相当施設と連絡と協力をしなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。</p>				
<p>○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開</p> <p>□他館での館蔵資料の発信</p> <p>□他館での委員、講師など</p> <p>□他館との共催事業</p>	<p>ソウル大学美術館、サントリー美術館といった国内外の美術館と共催した展覧会があり、それに伴う作品の貸借、学芸員の派遣など、活発におこなえた。他館での評価委員なども数多くこなしている。</p> <p>20年度：24件 241点 21年度：33件 256点 22年度：36件 231点 23年度：30件 298点</p> <p>他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 20年度 22件 21年度 15件 22年度 17件 23年度 25件</p> <p>①韓国のソウル大学美術館の要請により、相手館において当館の所蔵品展を開催し、岡参事の記念講演会もおこなった。展示指導・撤去には、岡参事ほか当館学芸員3名がソウルまで出張した。②「山本二三展」では、兵庫県立美術館と、互いに半券提示による入館料割引（団体料金適用）を実施。③サントリー美術館・東京文化財研究所と協力して、「南蛮美術の光と影」展をサントリーと当館で開催。④「平清盛」展、初日に「神戸・清盛隊」「宮島観光大使」「広島・清盛少女隊」が来館し。神戸の「ドラマ館」「歴史館」とは相互にチラシを設置。時に応じ、清盛隊も来館し展覧会の盛り上げにひと役かった。</p>	<p>本年度はソウル大学美術館、サントリー美術館と連携した展覧会などがあり、それに伴う活動により件数としては増加した。</p> <p>依頼に応じて専門性を生かした委員・講師などの館外活動を実施している。</p> <p>本年度はソウル大学美術館、サントリー美術館と連携した展覧会などがあり、それに伴う活動により件数としては増加した。県立美術館とは、時期的・内容的に連携可能な展覧会があったため、有意義な共催事業が開催できた。清盛展では神戸の「歴史館」「ドラマ館」だけでなく、広島県や宮島町とも協力できた。</p>	A	A

◎各種講座を一層充実します	連年通りの講座にとどまっているが、継続することによって、市民や受講者に広く認知されていると考えられる。その点では、スタイルの変更は不要として良いのかもしれない。ただ、講座を一層充実させるという点では、一工夫が欲しい。			A	
【目標 計画】 生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく					
○講座内容の開発、充実	各種講座やギャラリートークの実施によって、生涯学習の場としての機能は果たせていると思う。また、これらの講座を通して、館蔵品の魅力も発信できている。今後は、新たな講座の開発にも力を入れるべきと考えられる。				
□事業数	6回+3回	予定通り6回+3回の実施。ただし、今年度も歴史・美術の分野で行なわれたが、次年度で古地図・考古関係の内容で実施される予定。			
□参加者数	ミュージアム講座：170人 たのしみ講座：17名：	ミュージアム講座：170人 たのしみ講座：17名：	ミュージアム講座 170人参加 (申し込み202人)、 たのしみ講座 17名(申し込み17人)	ミュージアム講座：119%	高齢者を中心に定員を上回る応募を得た。
○利用者ニーズの把握	講座最終回に、アンケートを実施しているという目標は達せられているが、受講者の要望に応えられているかどうかの検討を行い、利用者ニーズの把握が必要である。				
□利用者満足度	「博物館を楽しむ」「ミュージアム講座」のアンケートを実施。各講座最終回においてアンケート調査	受講者のアンケート結果は概ね好評であった。			
◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	館独自でホームページ更新手続きが簡便になり、またそれを担う担当者も増えることにより、迅速かつさまざまな情報提供をホームページ上でおこなえるようになった。今後とも新聞、テレビなどマスメディア、タウン誌などのミニコミ誌などの活用によって、幅広い情報提供の方策を探るべきである。				
【目標 計画】 博物館の基本活動は文化財の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、いっそうの発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。					
○広報活動の充実	大型展では広報事務局を通じ、あわせて館独自の広報ルートによって、幅広い情報提供ができた。				
□広報掲載件数	近年インターネットでの情報提供依頼が増加しているため、それへの対応が増加している。自主企画展の、新聞・雑誌等への情報提供は例年とおり。提供数は展覧会の内容・規模に左右されるのも例年とおりである。「山本二三展」は当方の予想以上の反響があり、従来の提供先以外のデジタルアート系やマンガ系雑誌からも問合せがあった。広報事務局から提供される広報を除いても昨年以上の広報活動をおこなった。				

○HPの更新	ホームページの更新手続きが簡便になり、かつそれを担う担当者が増えることにより、更新頻度と迅速さが上昇した。				A
□HPの更新回数、ページ数、アクセス数	アクセス数：20年度413220、 21年度：297000、 22年度：400,384、 23年度：437,902	ホームページ自体は遅延なく公開できたが、出品目録のアップを早める努力が必要。アクセス数は前年度を10%近く上回った。			A
○メール会員向けの新たな情報発信事業の開発	22年度に議論・討論した結果、当面は導入をおこなわないことにした。				F
□メール会員への発信数、メール会員数	22年度に議論・討論した結果、当面は導入をおこなわないことにした。				F
◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行ないます	前年度と問題点は同じである。現状のアンケート調査の活用と、さらなる調査方法を検討することが必要で、公開方法も含めて担当者と協議し前進させなければならない。			C	
【目標 計画】 博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完しあわなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない。					
○定期的な利用者へのアンケート調査 ○非来館者を含めた意識調査	アンケート調査については、投げ入れ式で実施し、回収後はただちに回覧し、そこに記された意見については迅速に対応した。集計作業については滞ることが多く、アンケート項目の減少などの改良が望まれる。アンケート結果の分析と活用については担当者間での議論が必要である。				C
□アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握	アンケート結果報告が展覧会終了後一週間以内におこなえなかった。学習支援員（ボランティア）に協力をおいているが、自主企画特別展や企画展では入力を館内でおこなわねばならないため時間がかかった。特に自由意見欄の記入内容を入力するのに時間がかかる。				B
□HPへの掲載・公開	館外へのアンケート結果の公開についての館内での議論は進まなかった。新年度に改めて検討することとなった。				C
□アンケート評価への対応と改善	展覧会の満足度については、即時集計して回覧することができた。学習支援交流員（ボランティア）の協力を仰いだが、展覧会終了後1週間以内には集計完了できなかった点が改善点として残った。				B
◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります	交流の場として、博物館におけるワークショップなどで交流員の自主的な活動が形成されつつある。新たな活動の方向性を模索することで、今後の充実と発展が果たせると考えられる。そのためにも館の職員とともに共働を図って欲しい。			A	
【目標 計画】 博物館運営のなかで、人々が交流できる場としてボランティアは一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・ボランティア相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る					
○ボランティア活動の実施	3年目の活動となり、自主的な活動が徐々に行われるようになり、学習支援交流員の活動が根付きつつある。ワークショップのみならず、アンケート処理や、発送作業の面で積極的な参加が認められる。				A

<input type="checkbox"/> 実績（人数、回数、内容）	平成21年度 のべ227名 平成22年度 のべ719名 平成23年度 のべ502名	交流員は自主的な活動を積極的に行った。博物館側の職員については、担当以外の定例会への参加が少ないことなど、館員と交流員との積極的な交流が望まれる。また、交流員活動に関して、予算の裏付けがない点は今後の大きな課題である。			A
○活動内容の充実	活動内容は継続されているので、既存のものについては場が作られていると考えられる。ただ新たな事業を創出できるような場が出来ているかについては疑問。			B	
<input type="checkbox"/> 活動内容		今年度は、交流員の構成が昨年度からの継続が12名、新規12名で、既存のワークショップについての学習会など、新規事業ではなく、これまでのワークショップの継続・充実に努めた。			A
すべての人々にやさしい博物館にします		リニューアル基本計画を策定できた。今後は、基本計画実現に向け、財政当局との協議など努力していく。	B		
◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。		リニューアル基本計画が策定できてよかった。今後は、基本計画実現に向けて努力していく。		B	
【目標 計画】 これからの博物館は、高齢者・障害者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていける必要がある。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。					
○施設の計画的な補修、改修 ○省エネルギー・省資源への取り組み		少ない予算の中で、優先順位を決め、できる範囲で、計画的な補修ができるよう努力した。今後はリニューアル基本計画を踏まえながら、計画的な修繕に努める。リニューアル基本計画が作成でき、今後の指針ができてよかった。今後、基本計画が実現できるよう努力したい。		B	
<input type="checkbox"/> 消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保		特に問題はでていないが、施設・設備の老朽化が進んでおり、今後早い段階での補修が必要である。			B
<input type="checkbox"/> 神戸環境マネジメントシステムを生かした環境負荷の低減		コピーの削減目標に届かなかったが、その他の項目では問題はなかった。今後もKEMSのシステムを活かした方で、努力を積み重ねたい。			B
○ユニバーサルデザインへの対応		基本計画が作成でき一歩前進した。今後は実現に努力したい。		B	
<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザイン取組		ユニバーサルデザインの基本計画ができたが、計画を実現していくことは、予算の制約等で難しい。今後とも基本計画が実現できるようがんばって行きたい。			B

◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します		すべてのスタッフがお客様の気持ちになって対応し、博物館はよかったとっていただきたいが、ごくわずかではあるが、アンケートで対応が悪いとのお叱りもあった。今後は少しでもそういった声をなくすため、努力して行きたい。		B	
【目標 計画】 これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。					
	○人的サービスの充実		特に問題はなかったが、特別展については、博物館の想定入館者を超える場合もあり、その場合は入館をお待ちいただくこともある。こまめな対応が必要になる。今後そういった事態に対応するためにもスタッフの一層のお客様への配慮ある対応が必要である。		B
	□館内の運営協力体制		特に問題はなかった。ただ、はじめて万引事件があり、事案によっては、緊密に連携する必要もあり、今後連携のあり方を検討する必要がある。		B
	□職員の研修		必要な研修には参加できており、最低限の対応はできたと考えている。		B
	□利用者サービス		アンケートの結果でも、不満がある方は、ごくわずかであり、スタッフ一同十分に利用者サービスに心がけている。今後とも利用者の気持ちになって対応して行きたい。		B
◎予算の充実に努めます		必要最低限の予算は確保した。予算額としては、不十分であるが、現在の状況ではやむをえないと考えている。		B	
【目標 計画】 市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少している。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上にに行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していく必要がある。					
	○予算の充実	不十分ながら、運営に支障のないような、予算額の確保ができたと考えている。			B
	□支援金・助成金の獲得		営利を目的としている企業からは、現在の厳しい経済状況では、なかなか支援をいただくことが難しい状態である。支援のあり方を含めて検討していく必要がある。		B
	○活動指標の内部評価と外部評価の実施	事業の自己評価をできるだけわかりやすい評価基準としている。			B
	□自己点検、評価システム		計画通りに事務が進まない問題点があり、事務が煩雑にならないような工夫や改善が必要。またこの自己点検評価を有効に活用していくため、計画、目標の設定時点での十分な意見交換など、充実を図っていくとともに、今回が4回目の自己点検評価となるため、今後の修正・改善に向けて検討を進める必要がある。		B